

## 東京都立産業技術高等専門学校 第3期第1回運営協力者会議議事録

- 日 時：平成26年12月3日（水）15:00 開会、17:00 閉会
- 場 所：東京都立産業技術高等専門学校荒川キャンパス 2階大会議室
- 出席者：天野隆委員、井上浩委員、大石哲也委員、松田正雄委員、村西明委員、  
鈴木雅洋委員、高田十志和委員、田原校長、渡辺副校長、安田管理部長、  
保福ものづくり工学科長、吉澤創造工学専攻長、上島学生主事、高橋学生主事
- 座 長：天野隆委員
- 副座長：鈴木雅洋委員
- 進 行：安田管理部長
- 欠 席：杉山裕一委員、田丸健三郎委員、十河慎一委員
- オブザーバー：生方地域貢献・研究推進センター長

（挨拶）

主催者挨拶

田原校長

今日は皆様、お忙しいところ運営協力者会議に御出席いただきありがとうございます。

産業技術高専は公立大学法人首都大学東京が設置する高専として平成20年にスタートし、約6年が経っているが、前身校を含めると50年以上に渡り産業界に人材を輩出してきた。現在、最近の産業界の高度化、複合化、グローバル化に対応するため、教育改革や機構改革に取り組んでいる。また、過去の2期における運営協力者会議の提言を受け、国際化やキャリア支援体制について改革を図っている。高専は高等教育機関の一つとして位置づけられており、高等教育機関は自己点検評価や外部評価を通じて自己改革を進めていくというスキームを持つこととされている。本校も毎年自己点検を実施し、それを基に自己評価を行っている。この運営協力者会議においては、自己点検評価が適切に行われているかということと、改善のサイクルが妥当であるかということについて評価していただくと共に、本校が特に重要と考える項目について意見を頂戴することとなっている。今回については本校に期待する社会貢献ということで意見を賜りたいと思っている。委員の皆様にはそれぞれの立場から忌憚のないご意見をいただき、本校の発展に力添えいただき。よろしくお願いたします。

（委員自己紹介）

天野委員

広沢電機工業の天野です。大田区にある60年弱の歴史がある会社で40名程の事業を担当させていただいている。今回初参加である。中小企業家同友会に所属しており、大田支

部の高専交流委員会にて高専品川キャンパス側と企業側で、合同で事業を営む手助けをさせていただいている。その委員会の前委員長からの紹介で今回参加させていただいた。よろしくお願ひいたします。

#### 井上委員

荒川区にて、大東工業という産業用の液体用のポンプメーカーを経営している井上です。運営協力者会議は初参加であるため、よろしくお願ひいたします。

#### 大石委員

大石電機工業の大石です。私どもの会社は昭和 2 年より、東大井で仕事をしている。船舶用の電気機器を開発からメンテナンスまで全て社内で行っている。東京商工会議所の品川支部の会長からお話をいただき、参加することとなった。よろしくお願ひいたします。

#### 松田委員

松田金型工業の松田です。私どもは荒川で 70 年程金型を製造している。最近の不況に対してどうやっていったらいいか、むしろ指針を私どもが聞きたいくらいである。今日はよろしくお願ひいたします。

#### 村西委員

富士通の村西です。運営協力者会議は第 1 期から参加させていただいており、丸 4 年務めさせていただき、今回 3 期目であり、お役に立てるかわからないが頑張っていきたいと思う。

前任の荒金校長が元富士通だったということもあり、委員をやらせていただいている。富士通の持っている特許を、学生にアイデアを作っていただき中小企業のビジネスにつなげるような活動を会社として行っている。今般、富士通が共催している知財プレゼン大会に産業技術高専の生徒さんにも出ていただけるということで、いろいろ御協力させていただければと思う。皆様、よろしくお願ひいたします。

#### 鈴木委員

地方独立行政法人東京都立産業技術研究センターの理事、事業化支援本部長、地域技術支援部長を兼務している、鈴木です。前回の 8 月 8 日から今回 2 回目ということになる。

私どもは中小企業の方々の技術支援を行う、東京都が設立した法人である。現在、本部が江東区の青海にあり、また、西立川に多摩テクノプラザがあり、他 3 つの支所全部で 300 人ほどの研究員で構成されている。産技高専の卒業生の方も職員として何人か活躍してもらっている。今後ともよろしくお願ひいたします。

高田委員

東京工業大学の高田です。田原校長からお話があり、初めて加わらせていただいた。私は起業経験もなく、運営については全くの素人であるが、高専とは大変なじみが深く、私自身、富山の工業高専の出身であり、私の兄が工業高専の教員をしていた。更に、私が大阪府立大学に勤めていた時には、府立高専で授業を行っていた。よろしくお願ひいたします。

(本校紹介)

田原校長

私から本校の紹介をさせていただきます。

まず本校の使命であるが、首都東京の産業振興や課題解決に貢献するものづくりスペシャリストの育成となっており、これは東京都の設置する高専ということで東京都から与えられた使命である。また教育理念については、本科と、その上にある専攻科についてそれぞれ定められており、本科については創造力を有した実践的な技術者を育成する。専攻科については総合的実践的技術者を育成するというのが本校の教育理念となっている。

このスライドは本校が、日本の教育制度の中でどのような位置にあるかということと、法人の中でどのような位置付けにあるかということを示したものである。中学校を卒業すると高校へ進学し、高校から大学、大学院へ行くというのが現代の日本のメインの進学のルートである。一方、高等専門学校は、中学校を卒業した後 5 年間、更にその上の専攻科の 2 年間で技術者を育成するという仕組みになっている。昭和 37 年に学校教育法が改正され、初めて戦後の単線型から複線型のラインができた。これが高専である。

産業技術高専の特徴は、1 年生時は専門に属さない混成クラスとしており、2 年生時に 8 つあるコースから自分の行きたいコースを選ぶということである。8 つのコースは品川と荒川にそれぞれ 4 コースずつ展開しており、品川は基礎的な学問分野であり、荒川は複合的な分野となっている。更に、5 年の上に 2 年の専攻科を設置しており、この 2 年間で卒業すると大卒と同等の学年になるので、大学評価・学位授与機構の審査を受けて学位が取れる。高専卒は現在、準学士という称号になっており、学位規則に定められた学位ではないという位置付けになっている。それぞれの進路についてであるが、大体 6 割が 5 年間を経て社会に出て行き、残りの 4 割については大学への編入のルート、また専攻科から一部は大学院に進むルートに分かれている。

公立大学法人首都大学東京は、高専と首都大学東京と産業技術大学院大学を運営しており、3 つの異なる高等教育機関が 1 つの法人の中で運営されているということが特徴である。

今後の中長期を考えた時に、私どもの現在対応すべき課題には、どのような課題があるかということを示したのが次のスライドである。まず 1 点目は、高専卒は準学士であり学位ではないということ。ちなみに短期大学卒は短期大学士という学位規則に定められた学位であり、同じ年齢でありながら、高専は称号でしかない。これは、国内では通用するが、

国際的な社会に出たときに、高専とはどういったものであるのかを説明しなければならないことが、我々の今の悩みである。つまり、国際標準になっていないということである。

また、日本の技術者教育を考えてみると、工業高校は技術者教育については既に随分前から放棄しているのが現状であると考えている。東京都も工業高校がいくつかあるが、そのいくつかは既に進学校になっている。それから大学についてであるが、ものづくりという現場の教育ができていないかという点と必ずしもできていないのが現状ではないかというのが我々の認識である。

それから産技高専の強みと弱みは何かということであるが、法人内で 3 つの異なる教育機関が存在するので、これを上手く組み合わせれば技術者教育の相乗効果を生み出すチャンスがあると考えており、これが強みである。弱みとしては知名度不足である。高専というものが中学校からほとんど見えないというのが現状である。50 年の歴史があるが、東京という教育機関が集中した中では、高専が中学生の親や中学生からほとんど見えず、中学校の先生方もよく分からないというのが現状である。したがって優秀な人材が集まりにくい。

我々に与えられた使命を考えた時に、世界に通用するディプロマをつくっていく必要があるのではないかと考えることがある。イギリスや東南アジアは職業資格と学位とが並列する形の制度を持っており、ディプロマについても整備されている。もう 1 つは日本の技術者教育を担う高等教育機関であるべきと考えている。

私が 4 月に校長に就任してから掲げているのは、新たな都市型高専を創出しようということである。都市型高専とは公立大学法人首都大学東京全体として日本の技術者教育を担い、本校はその中心となって中核技術者を輩出するということである。そのためには、高専ディプロマの確立や、産業界のニーズに応えていかなければならない。特に今考えているのは、航空技術者の育成である。日本で自動車産業の次に位置付けられる一つが航空産業であるが、技術者が育っていない。また、日本にはスキルスタンダードがない。その中で、航空産業をどうしていくかを考えた時に、航空技術者を育てていかなければならないと考えている。それから、新たな教育研究に対応できる施設や設備の確保である。ものづくり自体がこれから変わっていく可能性があると考えており、それに対応できる技術者を今から育てていくためにはそれなりの施設や設備の確保が必要である。また、教員の国際化についてこれから手を付けなければならぬと考えている。

私としては新しい都市型高専を産業技術高専からつくり出していくということでこれからいろいろな施策をスタートさせていきたいと考えている。この辺の話についてもいろいろな御意見を伺うこともあるかと思う。よろしく願いいたします。

(プロモーション DVD 上映)

プロモーション DVD は中学生向けの学校説明会などの際に活用している。

(座長選任)

松田委員

広沢電機工業の天野専務を推薦したい。

(座長選任について一同賛同)

天野委員

承知しました。よろしく願いいたします。

(副座長選任)

座長の推薦で選任

天野座長

産業技術研究センターの鈴木様をお願いしたい。

(副座長選任について一同賛同)

鈴木副座長

承知いたしました。

(座長挨拶)

(副座長挨拶)

議事 (概要)

## 議題 本校に期待する社会貢献について

(本校に期待する社会貢献について現状説明)

渡辺副校長

本校に期待する社会貢献ということであるが、地域連携事業に絞って状況を説明させていただく。本校が考えている地域連携は 3 つの柱からなっている。人材育成と地域交流と産業振興である。人材育成は主にオープンカレッジで行っている。産業振興は産業技術研究センターとの連携を中心に行っている。地域交流は地元との連携を行っている。新しい切り口として、知財活用を、富士通の特許を使って信金と中小企業、高専の主に学生が主役になり行っている。

まずオープンカレッジについてであるが、本年度では荒川と品川合わせて主催講座を 19 講座行っている。主に 3 つあり、未来エンジニア、技術者育成、生涯学習となっている。未来エンジニアは小中学生を対象とした講座で、例えば中学生のための楽しいロボット講座というものがある。次に技術者育成は、地域の若手技術者を対象に行っている講座であり、例えば機械技術者にも分かる電機計測の基礎というものがある。最後に、生涯学習は、地域の方々全員を対象としたものである。例えば生活支援工学入門がある。また、主な共催講座ということで 6 講座開いている。品川区では自分でつくるロボット講座を行い、渋谷区では小中学生対象のロボット講座というものが人気である。受託講座としては若手技

術者支援のための基礎講座ということで 8 講座開いている。機械設計のための基礎というものはその 1 つであり品川区や大田区の産業振興協会と行っている。それから若手技術者支援のための出前講座がある。本校の教員が赴き、講座を行っている。

また、先程話があった産技研とは、連携協定を平成 23 年 9 月 12 日に締結した。産業振興に関する人材育成や都内の中小企業等の技術相談や技術指導を行っている。更に、講座に係る相互協力ということで今年は地震による揺れの低減技術について本校教員が講座を行っている。

地元の連携ということでは、2 つに分けられる。1 つは情報交換会による情報交換で、品川キャンパスでは、品川区、大田区、産技研で作った委員会である地域連携委員会で行っている。荒川キャンパスでは TASK (タスク) という荒川区の他に 4 つの区が参加している産業活性化プロジェクトがあり、そこで情報交換を行っている。地元との連携においての主な事業としては共同研究・技術相談の拡充や技術支援講座の実施である。それから地元のイベントにも参加しており、品川では OTA ふれあいフェスタ、荒川では荒川区産業展に参加している。

先程、座長からも話があったが、品川キャンパスでは東京中小企業家同友会の大田支部との交流委員会があり、そこでは 3 つのことを行っている。1 つ目は中小企業家経営塾の実施で、中小企業の経営者に講演をいただき、実際の企業活動を学ぶ機会を提供している。これは非常に高い評価を受けている。2 つ目は中国の大連に学生を派遣する事業である。3 つ目は学園祭を利用し、共催のシンポジウムの開催も行っている。また、ビジネスアイデア創出ということで、富士通の特許を活用して学生のアイデアで商品企画を提案して中小企業の製品化に結びつけるというテーマで行うプレゼン大会がある。富士通の方から声をかけていただき本校からも 2 チームが出場した。1 チームが全国大会で発表を行うこととなっている。

地域連携は、主に教員がやることと、学生が主体となって行うことの 2 通りあるということが本校の特徴であると思っている。

#### 松田委員

説明の中で中小企業家経営塾を紹介していたが、実際に経営者がどのくらい困っているか、そのためにどういう人材を育てたらいいかということについて深く考えないといけないと感じる。高度成長期では、社員が一つのパーツのような感じで、ものを作ることにしかしていない。しかし、アイデアを創出することが一番大事ではないかと思っている。これからの時代はこの部分についての教育を充実させなければいけないのではないか。今までのように、ただものを作り大量生産するのに間に合わせればいいということだけでは通用しない。私どもは今、金型の製造を行っているが、試作品を作成し上手くいくと海外へ持って行かれてしまう。中小企業はいろいろな考えを創出しているが、国際競争の中、海外で製品をつくられてしまう。しかし、私どもの金型の話になるが、1 個の製品を光造形でつ

くった時は 24 時間かかるものを、当社の金型では 2 分 30 秒でつくることができるようになるなど、国際競争の環境の中でも、価値あるものをつくっている。学校は、価値あるものをつくっていくという考えを持った学生を育てていけばよいと思う。

#### 吉澤創造工学専攻長

我々も創造的技術者の育成に取り組んでいる。その一つの方法としてエンジニアリングデザインというものがあり、多く使われ始めている。これは、まず学生たちに問題を発見させ、それをどうやって解決するかという問題発見解決型の勉強をさせるというものである。こういったことを段階的に行い、創造性ある技術者を育成しようとしている。

#### 村西委員

これからの時代はだんだんテクノロジーアウトだけでは苦しい時代になってきている。DVD の中での学生のインタビューにあったような、おじいちゃんやおばあちゃんのために何とかしたいといった、いわゆるエクスペリエンスを起点としたテクノロジーやサービス、プロダクトを考えていくことが大事。

これから化石燃料の社会から水素の社会に大きくシフトしようとしている中で、こういった取組をするのかも高専として考えていかなければならないのではないかと思う。こういったことも社会貢献になってくると思う。

#### 井上委員

企業として何を望むかという、やはり第一には優秀な学生を輩出していただきたい。現在国内の工場は研究所化し、開発工場となっている。開発工場で試作品を作り大量生産する段階になると海外へ持って行ってしまう。そのため、国内で技術者として仕事をしようと思えば、かつての研究機関的なハイレベルの人が求められていると思う。当社は機械ポンプメーカーであるが、当社の戦略も同様であり、納品している主要自動車メーカーの工場は研究所化しており、そこに対しての製品に求められる仕様も高度なものになり、それに応えられるような設計者が必要となる。そしてどんな設計者が必要であるかという、機械工学の基礎知識のある人である。実際にもものを作ることは会社に入ってからでも教えられるため、卒業時の学生には基礎知識を求めている。

#### 大石委員

産業革命のときに必要だった学問が機械工学の基礎の力学になっていると思う。現在、様々な学士があるが、基本的には基礎は決まっており、これを学ぶ時間は、派生した新しい学問を学ぶことより大事であると思う。例えば、機械の基礎であったり、電気であれば磁気学や回路学であったりといった基本的なことを学んだ上で、いろいろなことへ派生していくことに興味を持たすような教育をお願いしたい。

また、国際的な点について、日本のことを理解しないで海外の人をアテンドすることは難しく、自分なりに日本のことを理解できた上で、英語で会話ができないと、まともな扱いを受けてもらえないということがある。

一方で、都内では様々な公害問題がある。都内の工業を下支えするために、公害問題への対応を充実させることを考えていただきたい。

5年という短い時間であるが、基礎を学んだ上で、多様なことに興味を持たせられるような教育をぜひ行ってほしい。

#### 保福ものづくり工学科長

基礎科目の部分については、本校だけではなく高専機構も含めて、コア科目として根付かせようという動きがある。例えば、機械で言えば四力をメインとした科目を、到達度がある程度計れる形で基礎的な科目として設定し、最終的にどの部分をどのレベルまで到達させるかというシステムである。このことについては、学校側は対応していかなければならないとして、現在取組み始めている。

#### 渡辺副校長

保福ものづくり工学科長からの話で、どこまで技能を持っているのかなどといった話があったが、例えば機械であればこのレベルまでは満たしていなければならないというものがある。そして満たしているかを学校がチェックをしている。また、複合学科を設けている大学や高専が増えており、例えば複合学科では機械と電気が半々ということもありどのレベルまで到達させるかという問題はあがあるが、最低限の能力を満たした技術者を育成するといったことが第一命題であり、こういったことに取組んでいる。

#### 高田委員

教育機関としての立場で話をさせていただく。先日、帝人の副社長を務めていた山口氏の講演を聴いたが、追いつけ追い越せの時代が終わり、失われた20年が来た中で、考え方そのものを変えなければならないとのことであった。要するに人を育てるという観点でも考え方を変えなければならないということである。私も学生を育てるという立場で言うと、学生に目的を持たせることはとても大事だと思っている。私は研究室の学生に対し、研究報告書の最後に夢を書くように指示している。具体的なものがなくてもよいと言っているが、夢を書けない学生がたくさんいる。私は、ある目的があって、こんなことをやりたいと思って実行できるような教育を受けた人間を世の中に送り出さなければいけないと思っており、社会貢献という観点でも、単に技術を供与したり、何かに協力したりといったことだけでなく、夢を描けるような技術者を企業と共に育成することができたら素晴らしいと考えている。

#### 村西委員

夢の話であるが、最近の新入社員に ICT での将来像を聞くと、手段の話をし、誰が描いても同じようなことしか出てこない。手段ではなく目的や最終的にどういう社会にしたいのかということが描けない人が多い。

また、先程、国内の工場が研究所化しているといった話があったが、弊社でも同じような状況になっている。オペレーショナルな仕事は価値がなくなってきており、オペレーショナルな仕事を基に創造して何か違うことをやる人がいない。そこで、単にオペレーショナルな仕事をしている人たちはどうすればよいかという問題になる。単にオペレーショナルな仕事をしている人たちは 50 歳くらいまで同じ仕事をしてきており、今更他の仕事ができない状況である。しかし、終身雇用となっているため、どうしていかかが非常に問題となっている。

ものづくりとなると効率化が重要であるためトヨタ生産方式も取入れており、これは基本的には現場力で何とかするという仕組みであるが、それも段々と限界がきている。現在、ドイツのインダストリアル 4.0 というものがあり、これは、物流等の外部環境の取得やそれに伴う生産ラインの組立など今まで人が行っていたアナログな部分をインターネットで行ってしまうというものである。日本の強みであるアナログ的な現場力をそいでデジタルへ移行していく。こういった時代になっていくと現場力をいくら上げてもついていけないため、創造性や変革力といった点を考えていかなければならないと思っている。

#### 鈴木副座長

産技高専に期待する社会貢献についてということで考えると、一言で言うと産業人材の育成ということである。最近の若い人は、あることを指示すると非常に的確に素早く行うが、工夫して新しい発想で何かをやるという応用力が足りないように感じる。工夫や新しい発想ができる学生を育てるということは非常に大事であると考えている。これまでの日本は生産工程の中の改善というプロセスイノベーションは非常に得意であったが、プロダクトイノベーションはまだまだ不得意であり、私どもの機関でも、新しい技術や製品開発などに力を入れている。

また、産技高専の強みであるが、やはり実技が根底にあると感じる。企業に入ってから実技的なものは指導できるといった話があり確かにそのとおりではあるが、必ずしも全ての中小企業がそういった体制になっていないと思うし、それができる組織は人材育成プログラムがしっかりしている組織であると思う。私どもの職員も同様であるが、知識だけでは頭ばかり大きくなってしまい、何かやろうとしても自分で作業ができないということが非常に問題である。産技高専では学生がボール盤や旋盤も使っており、この点が非常に強みであると感じている。逆に弱みであるが、知名度が足りない。知名度を上げることは非常に大事である。例えば、卒業した学生を調査しフォローして、様々なところで活躍しているということを見せる。卒業生がどれだけ活躍しているかということが一番の PR にな

と思う。

#### 天野座長

先程、中小企業家経営塾の話があったが、私も参加させていただいている。そこでは起業した社長の話を学生と一緒に聞き、後半では学生たちがテーマを持って議論している。しかし、見てみると、誰かが主導権を持って進めると議論が盛り上がるが、議論が始まるのが遅く、なかなか右手が挙がらないということがある。これからは主張できる技術者というものが大事であると思う。自分をどこまで説明するか、自社の技術をどこまで説明するかということであり、お客さんに理解をしていただいて初めて技術が伝わったということになると思う。弊社においても同様であるが、技術系の人間は話をすることが得意でないということが見受けられるため、プレゼン技術や書類による報告といった基礎的なことをやっていただきたい。

#### 上島学生主事

地域との連携という点であるが、先程のDVDで燃焼器が映っていたが、あれは企業と私の研究室が共同で開発したものである。エネルギー問題についてはここ何年間か研究してきたが、東日本大震災の後で、油に代わるものとして粉体燃焼の開発を研究室で実験している際に企業と連携を行った。こういった、目的がはっきりしている研究テーマに対し学生を参加させたところ、学生の取組姿勢が変わったということがあった。この研究が世の中に出るといことでモチベーションがあがり、特許が取れる可能性もある取組に参画したいという代えがたい体験をしている。大学においては多くの企業が連携を図っているように思うが、高専においてはあまり連携が図れていないように感じており、特に若い教員が企業との連携といったことに参加する機会がなかなかないと感じる。企業との連携といったことに参加するきっかけ等について御意見をいただければと思う。

#### 松田委員

私どもはプラスチックの金型をやっておりまして、その廃棄物で業界ではかなり困っている。エチレン系とスチレン系は一緒にできないため二次製品として扱えない。廃棄物として燃やそうとしても燃焼率が高く、釜が壊れてしまうため焼却がうまくいかない。上島学生主事の話で燃料の話があったが、どうにか工夫して、燃料ではなくてプラスチックの製品として使われるようなことを考えていただけないのだろうか。いずれにしても、産業は廃棄物と背中合わせであり環境問題で困っている。

また、先日新聞のコラムで小松製作所の坂根氏の話を読んでいたが、そこには、製造業において、ものを売るために大事なことがあり一つはただ売るだけというセーリングである。それからただ考案するだけというマーケティングであり、最後にブランド志向であるブランディングである。ブランディングは価格が高くて絶対にも買ってもらえる製品を作

ることであり、これを行うことで業績が改善していったとのことであった。小松製作所ではブランディングを行うため、基礎科学を熟練させた技術により 4 階建ての高さのブルドーザーを作った。そのブルドーザーは世界で君臨している。私どもの社員にもこの小松製作所の話をするが反応が鈍い。しかしブランディングなどといったことは技術者としても大事なことであると思うので、学校でも経営面についてもある程度勉強していただきたい。

#### 高田委員

私どもの大学にはものづくりセンターというものがあり、そこにはネジなどいろいろな道具が置いてあり、自由に使ってよいということになっている。そこでは、学生は非常に楽しそうに、真剣に取り組んでいる。学生は何かやりたいというものがあると姿勢が変わってくると思うので、なるべく多くの学生に対して、何かをやりたいという意識を持たせてやりたいと思っている。

なぜ日本にノーベル賞受賞者が多くいるのだろうか。私は留学生も多く指導しているが、日本人と留学生の違いは、新しいものとか今までにないものを作るということに対する意識が高いということである。昭和 33 年に世界で一番高い建物である東京タワーを作り、もう一度、世界一高い建物であるスカイツリーを作った。つまり、日本人には、世界一になることは素晴らしいというような感覚が営々脈々と流れているのであろうと思う。だから日本人のそういった感覚を大切にしておいて特徴を出せるような形があればいいと常々思っており、学生に対し、創造性などを刺激してあげたらよいと思う。

#### 天野座長

他に意見を頂戴したいところではあるが、予定の時間となったのでこの辺でよろしいか。以上で本日の議論は終了しました。皆様、御協力大変ありがとうございました。

#### 安田管理部長

皆様、活発なご議論、貴重なご意見ありがとうございました。

#### 田原校長

貴重な御意見をありがとうございました。本校の第一の目的は、社会で有用な人材を輩出していくことがわかり、これを肝に銘じていきたい。また、世界は動いていて、ものをつくるということについて考え方が変わってきており、プロダクトイノベーションといったことも考えていかなければならないと感じている。一方で、学生にどうしたら夢を持たせられるかということを考えなければならない。特に私たちは中学校を卒業した、非常に若い世代を教育することになるので、この辺の教育が重要になってくることを感じた。

本日は本当にありがとうございました。

安田管理部長

本日は長時間にわたりありがとうございました。以上をもって会議を終了とする。